
名無しの小説

RYKB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名無しの小説

【Nコード】
N7168K

【作者名】
RYKB

【あらすじ】
早乙女アルト、ランカ・リー、シェリル・ノーム。
この3人が主人公の変わった話。

各話2000字を目標に頑張ってます。

1 1日目 朝（前書き）

マクロスFのアニメを見て、感動した作者が自分の好きなように人物達をいじっていきます。

アニメの人物が変わってしまうのは嫌だ！

という人は見ないほうがいいかなと思います。

1 1日目 朝

昇ったばかりの太陽の暖かい日差しが窓から差し込んでいた。が、窓のない部屋で寝ていた彼は、そんなことに全く気づかず寝ていた。

チャイムが鳴ってもまだ寝ていたため、玄関から入ってきた2人は激怒した。

「起きなさい、アルト！」

「起きてよ、アルト君！」

2人の声が重なり、部屋の中に響きわたる

「まったく、誰だよ…… って、えっ！」

やっと起きたアルトは目の前にいる2人の顔を見て、1mほど飛び上がった。

1 1日目 朝（後書き）

こんな感じで短い話を書いていく予定です。

（予定のため変わる可能性はあります）

2 1日目 朝2(前書き)

今回も前回と同じくからの長々です。

2 1日目 朝2

「ランカ！？シエリル！？ お前達どっ、どうしてこっ、ここに
いるんだ！」

「どうしてって、アンタを驚かせるためよ。でも、驚かす前に驚か
れちゃったわね」

「驚かす前？」

「ああ、シエリルさん。それ言っちゃだめですよ」

「いいのいいの。とにかく、アルト、きなさい！」

「ア、アルトくん、これつけるよ」

ランカに目隠しアイマスクをつけられたアルトは2人に連れられてとある場所

へ……

「やっと来たか。アルト」

「遅い」

2 1日目 朝2（後書き）

どうでしたか？

変なところがありましたら作者までお願いします。

3 1日目 昼(前書き)

今回も、人物をいじっていきます。

3 1日目 昼

「隊長！ブレラ！」

「ほお、声だけで俺だと判断できるようになったか。アルト」

簡単に忘れられる声じゃないとアルトは思ったが、その考えは次の瞬間にかけられた声によって一気に吹っ飛んでしまった。

「久しぶりだな。アルト姫」

「ミ、ミ、ミ、ミシエル！！」

「何だ？アルト、その顔は。幽霊でも見たような顔してるぞ」

「お、お前、い、生きていたのか！」

「じゃあ、目の前にいる俺は死んでいるとでも言うのか？」

「いや」

3 1日目 昼(後書き)

引き続き、何かあったら作者までお願いします。

4 1日目 昼2 (前書き)

久しぶりの更新です。

4 1日目 昼2

「それにしても……お前どうしてここに?」

アルトが誰もが思うであろう疑問を口にする。

「ああ、あの時確かに俺は 宇宙空間に放り出された。けど今俺は生きてここにいます。」

それは間違いない」

「それが間違いないのは認める。けど、宇宙からどうやって戻ってきたんだ?」

「アルト、お前普通のことしか口にできなくなったのか?」

「そうじゃないが……とにかく質問に答えろ!」

「怒ってもあいかわらず姫だな。まあいいや」

「教えてる!」

4 1日目 昼2(後書き)

引き続き何かあったら作者までお願いします。

5 1日目 昼3

「はやく教えてくださいよ！ミシエル先輩」

「お、ルカか。久しぶりだな」

「ミシエル！とつとと教えてろ」

「たっ、隊長」

アルト、ミシエル、ルカの声がきれいに揃った。

そして、ようやくミシエルが話し始めた。

「実は俺にも良くわからない」

「良くわからないって？」

ルカが頭上に『？』がついていてもいいような表情かおで尋ねる。

「それが、宇宙空間に放り出されたあとすぐ気を失った」

「そりゃ、当然だろ」

「進展が無いぞ！」

5 1日目 昼3 (後書き)

ネタが切れかかってきたので、ネタを提供してください！
お願いします

6 1日目 夜(前書き)

ちよつと時間が飛びます。

6 1日目 夜

「ふー」

すっかり疲れきったであろうアルトは、自室のベッドにつくなり大きく長いため息をついた。

「今日はいつたいたいなんだ？いきなりランカとシェリルがきて……驚かされたあと目隠しをされて……そしたらオズマ隊長とブレラがいて……そしたら……ミシエルがいた。ミシエル……かあいつがいつてからというもの色々あったな。ヘルメットを抱いて泣いてたクラン……。クラン!?」

「そういえば、クランは!?」

7 2日目 朝

この日アルトは早朝03:00に起きた。

どうしてもクランのことが気になってしまったのである。

そして、朝07:00頃 ルカを近くのカフェに呼び出した。

「アルト先輩、いきなりどうしたんですか？というか、何のために僕を？」

「ミシエルが帰ってきた後、クランに会ったのかなと思って……最近クラン見かけなかったからさ。」

お前なら、クランがどうしてるか知ってるか知っているだろ？」

「！ クラン大尉は……………」

お亡くなりになられました」

8 2日目 朝2

「クッ、クランが 亡くなった!？」

「どういうことだ? 教える ルカ!」

アルトがルカのむなぐらを思いつきり掴む。

「離してくださいよ。アルト先輩」

ハッ としてルカを離すアルト。

「お前、いったい何人好きな女がいるんだ?

ランカだけじゃなかったのか」

声の主を探すアルト。しかし、周りにその言葉を発しそうな人はいない。

「アルト先輩。ミシエル先輩よりも……」

「どこのどいつだ!」

「ここの俺だ」

そういつてルカの隣に立ったのは……

9 2日目 昼

「お前がランカのことを好きでないのなら、俺がランカをもらおう」

「ブ、ブレラ！」

「アルト先輩、ミシエル先輩に聞かれたら怒られますよ！」

「勝手な空想するな！」

まあ、アルトが起こるのも無理はないだろう。しかし、こんな大声出して会話しても

周りから痛い視線を浴びないのは、やはり、この3人が有名人だからだろう。

「ルカ〜」

ヒツツとしておそるおそる後ろを振り返った、ルカの視線の先には

.....

誰もいなかった。

10 2日目　夕

「アレなんだったんでしょね、アルト先輩」

「さあな」

カフェの帰り道。迷い込んできた猫に好かれて途方にくれているブレラを

おいといて帰るアルトとルカ。

たしかに声だけがしたら不気味なものだが、そんな感じは全くしない口調。

「よう、アルト。久しぶりだな」

「……！クツ、クラン!？」

「何をそんなに驚いているんだ？アルト」

普通誰もがそうするように（ブレラがどうだかは知らないが）素直に驚いたアルトは、

「ルカは!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7168k/>

名無しの小説

2011年4月11日20時46分発行